

本日の毎日新聞朝刊「ひと」欄に、富澤暉・陸幕長に登場願いました。一昨年私が書いた「出勤せず」は、富澤さんのモノローグ、バイオグラフィといってもいい連載だったので、あまりに距離感が近すぎるとも思ったのですが、安全保障問題に関心のある「ひと」欄担当デスクが、声をかけてくれて、書くなら私しかいないなあ、と執筆しました。

富澤さんが、川崎重工にいたときですから、もう20年近い付き合いになります。きっかけは忘れました。もしかしたら、同じ陸上競技部にいらしたツテを頼って、顧問室に遊び入ったのかもしれませんが。同室には、元空幕長の竹田五郎さんがいらっしまったように記憶しています。

20年ずっと薫陶を受け続けてきました。そう書くと、防衛記者が「ネタがほしくて」、自衛隊トップOBにすり寄る姿を想像されるかもしれませんが(もちろん、そういうことだってします!)、富澤さんは、自衛隊・安全保障問題の先生、さらに、戦史にとどまらない国内外の歴史に通暁していて、それをまさに自分のものとしていらっしやる人生の先輩として、私は接しておりました。教養というのは、まさにこういうことだと、私はいつも圧倒されておりました。

<民主主義は最悪の政治形態らしい。ただし、これまでに試されたすべての形態を別にすればの話であるが。>

話していると、チャーチルのそんな言葉がさらっと出てくる。

<大いなる精神は静かに忍耐する>

自衛隊幹部のあり方として、ドイツの詩人・劇作家のシラーの言葉が出てくる。それは、当時の陸自幹部候補生学校の卒業式で、前田学校長がすぐに引用しました。

国家を論じるときのホップス、そして福沢諭吉などなど。そういう政治思想家、偉人たちの言葉が、会話の中に出てくるということは、きちんと頭の中に整理されておかれているということで、私のようなブン屋は、もし同じようなことが言え、書けたとしても、参考書を横に置きながらしかできない。圧倒的な教養の差であります。

富澤さんは、自分が初級幹部だったころからトップの幕僚長にいたるまでの実体験を、そうした滋味深い言葉と、そして、安全保障の現実の論理を踏まえながら思いつくままに語られた。受け取る私はできが悪いので、なかなかぴんとこない。そうしたことをずっと続けていて、私は感覚としては、机の上に、ぱらぱらと宝石のような実話と言葉が散らばっている、それをあるとき思い立って、ひとつの「糸」でつなげてみたら、ひとつの読み物になった、それが「出勤せず」だったと思います。

地下鉄サリン事件対処、三島由紀夫との出会い、治安出動教範廃棄、警察庁警備局長との初会合……それらは、自衛隊が創設以来約40年のうちで「変容」していく、その時どきの、大事な局面なのですが、でも実は、それはそのまま富澤さんのバイオグラフィになっているというところが、すごいところなのであります。

私は「知の壁」「教養の壁」を痛感します。私の能力では、富澤さんの言葉を、また自分の裡側に蓄積し整理して高みに行くことはできなかつた。ただひたすら、聞き書きした結果が連載「出動せず」でした。それは本になり、改訂してポプラ社新書の「沈黙の自衛隊」になっています。

連載後に、富澤さんには本執筆の依頼が舞い込むようになり、自分のいままでの考えをひとつにまとめたのが「逆説の軍事論」であります。記事にも書きましたが、「趣味の論文書き」(!)でずっと考えてきたあれやこれやを、安全保障にまったく興味のない人向けに、ごく平易な言葉でつづってあります。ご本人は「売れなくてもいいんです。でも、できれば、政治や軍事を学びたい人の教科書のような本になってほしい」といいます、まさに、そんな本だと思います。

日本防衛学会が昨年創設した猪木正道賞に、今回から「特別賞」を新設して、いわゆる安全保障分野の啓蒙書を対象として表彰することに決めました。その第一回作が、富澤さんの本になりました。自衛官として組織で過ごしてきてトップに登り詰めた、そして安全保障の実際と古今東西の戦史、歴史に通じているなら、これほどの適任はいないかもしれません。もっといえば、お父さんは芥川賞作家ですから、幼少期から父の人脈の文人を見続けてきた。その強みもあります。

まったくの余談ですが、三島由紀夫がまだ初級幹部の富澤さんを富士学校の宿舎に訪ねてきた。1967年ごろのことです。話は盛り上がり、別口の懇親会が同期生を集めて御殿場で開かれた。そして、三島はクーデター計画をほのめかし始める。あのとき、富澤さんが、三島の「自衛官を巻き込んだクーデター計画」に心酔し、「わかりました、先生、ともに起ちましょう！」なんて言ってしまっていたら、そしてその結果、若手幹部がこぞってクーデターに参加していたら、日本の政治風景はまったく別のものになっていたはずで。

だけど、富澤さんは、当時の大人気作家、いまでいえば、立場は違いますが村上春樹みたいな作家に、こう言い放つのです。

「先生、私たちはそんなことはやれませんよ。私たちは役人ですから。国家公務員なんです」

私は燃え盛る三島の目の中の炎が、しゅんと消えていく場面を想像します。たぶん、絶句したと思います。作家の三島の頭には、226事件の青年将校のファンタジーがあった。だけど、実際、「違憲の存在」として「税金ドロボー」といわれ続けてリアルを生きる初級幹部の富澤さんらは、作家の幻想に付き合うわけにはいかなかった。ただ、何より、私は、富澤さんが、小さいころから作家というものを見て触れて感じて、作家、芸術家というものの生理を体感していたからこそその「でき

ません」だったと思います。教養もない、ただ社会の反感を請けて生きる地方出身の、たとえば私のような者がそこにいたら、たぶん頭に血が上っていたことでしょう。富澤さんがその場に来てくれて、本当に良かった、と心から思います。

富澤さんが本を書こうと決めたきっかけは、自分の自衛隊人生を振り返って、こう考えたからでした。

「退官時、1発の弾も撃たず、実戦も体験せず、自分のやってきたことはなんだったのか」

表彰式の挨拶でも、そのことに触れたのですが、私は実は、半年前にも同じことを聞きました。東大のゼミ生の勉強会に呼ばれ、戦争、軍事、そして軍事技術について語ったときです。それまでの口調が変わって、少し哀調を帯びたその言葉を、たぶんこれから日本社会を動かしていくであろう学生たちはしーんとして聞いていました。たぶん、軍事について学んだことのない学生たちは、その言葉の意味は正確には伝わらなかったでしょうが、その瞬間の、富澤さんの思いはなんとなく感じ取ったのだと思います。

私は学生たちよりは、自衛隊の来歴について知っています。「1発も撃たない」歴史の意味と、その中で「忍耐」して生きてきた幹部、隊員たちの思いも。軍人なのに弾を撃たない存在。軍人に弾を撃たせない国民。弾を撃たせないのにそれを軍人的に扱う国民、そして戦後の平和の僥倖について……………。

いま私たちの社会は、自衛官に弾を撃て、と命じ始めています。弾を撃つことを前提にしないと自衛官ではないのだ、と。それは正常な方向でありましょう。だけど、私は「撃たなかった」60余年の歴史も、同時に大事にしたいのです。世界史的にも、浅学な私にはわかりませんが、たぶんとても奇異な、ありえない、弾を撃たない軍隊の存在を60年以上許してきて、そのことで身につけた良さについても。「あれは間違いだったね」と一蹴することだけはしたくないのです。

富澤さんは、そこまでは言っていないかもしれませんが。だけど、私の受け止め方はそうでした。その意味を込めた、「ひと」欄でありました。短い文章ですが、よろしかったら読んでください。

## 富澤暉（とみざわ・ひかる）さん（78）

日本防衛学会が保守論壇の大御所、猪木正道・元防衛大学校長の名を冠した賞の特別賞を新設。「逆説の軍事論」（バジリコ）が初受賞した。表彰式で「無学、老骨の身、素直に喜んでおります」と述べた。

本人の弁とは裏腹に、受賞作は国家論、軍事史を素地に自衛隊の来歴・実務から喫緊の課題までを平易な文章で語り尽くす。関心が薄い安全保障の分野に、読者をいざなったことが評価された。

inRead 芥川賞作家、有為男（ういお）を父に持ち、防衛大を卒業して陸上自衛隊に入り、東西冷戦期は初級幹部として戦車乗り。冷戦が終わって北部方面総監時代は、陸自として初めての海外派遣となるカンボジア国連平和維持活動（PKO）に部下を送り出す。そして陸幕長として、同時多発毒ガステロの「地下鉄サリン事件」に直面した。自衛隊の「変容」を、責任あるポストで体験した一人である。

「退官時、一発の弾も撃たず実戦も体験せず、一体、自分のやってきたことは何だったのか。疑問を持ちました」。今春、東大ゼミ生の勉強会に呼ばれそ

う漏らした。その言葉を受賞あいさつでも繰り返した。軍事とは何なのか。その問い掛けが執筆の原点でもある。

ひとつの答えは「自分たちが戦わなかったから、日本は平和だった」。だからこそ、自衛隊のリアルを知ってほしいと願う。受賞作の序章をこう締めくくる。「歴史が教えるとおりに、最も危険なことは無知であることなのです」

文・滝野隆浩 写真・中村藍>